

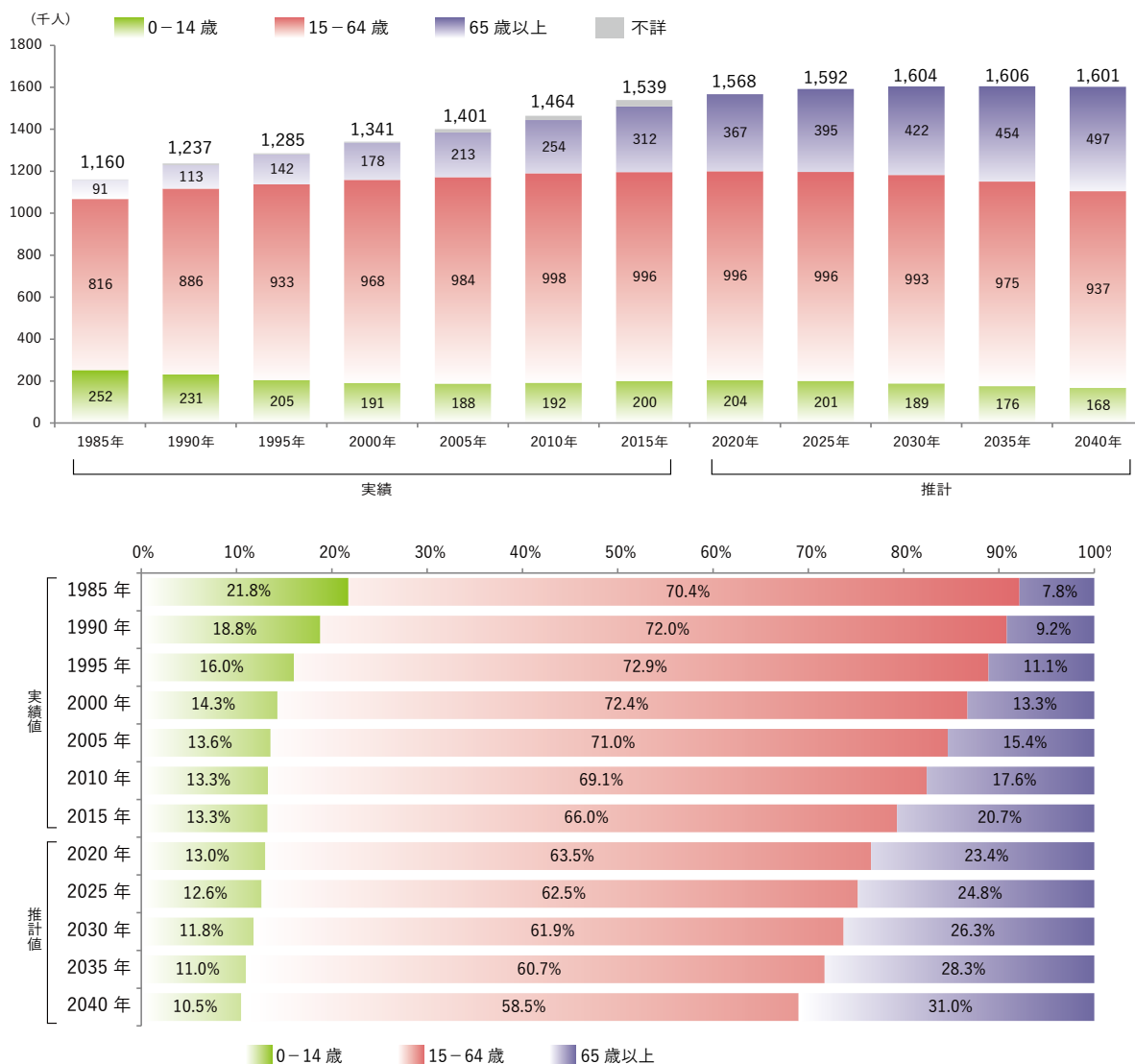
(2) 社会環境

1) 人口

本市の人口は、平成 27（2015）年の国勢調査で約 153 万 9 千人であり、前回調査時点の平成 22（2010）年と比較して、5.1%増加し、**政令指定都市第 5 位の人口**となっています。

特に、15～64 歳の割合は 64.8%と全国平均の 60.7%を上回っています。さらに本市では、10 代・20 代の割合が 22.1%と**政令指定都市のなかで最も若者の割合が高くな**っています。これは、市内に大学及び短期大学が 20 校立地しており、他都市と比べても学生数が多いためです。20 校という数は中国地方、四国地方、九州地方の各県の大学数と比較しても最も多く、本市は「学生の街」といえます。

将来推計人口においても、日本全体の人口が減少する中で、本市の人口は 2035 年頃まで約 20 年の間、増加が見込まれ、2030 年には 160 万人を超える見込みです。一方、年少人口（0～14 歳）は平成 17（2005）年頃から増加しているものの、**2020 年頃をピー**

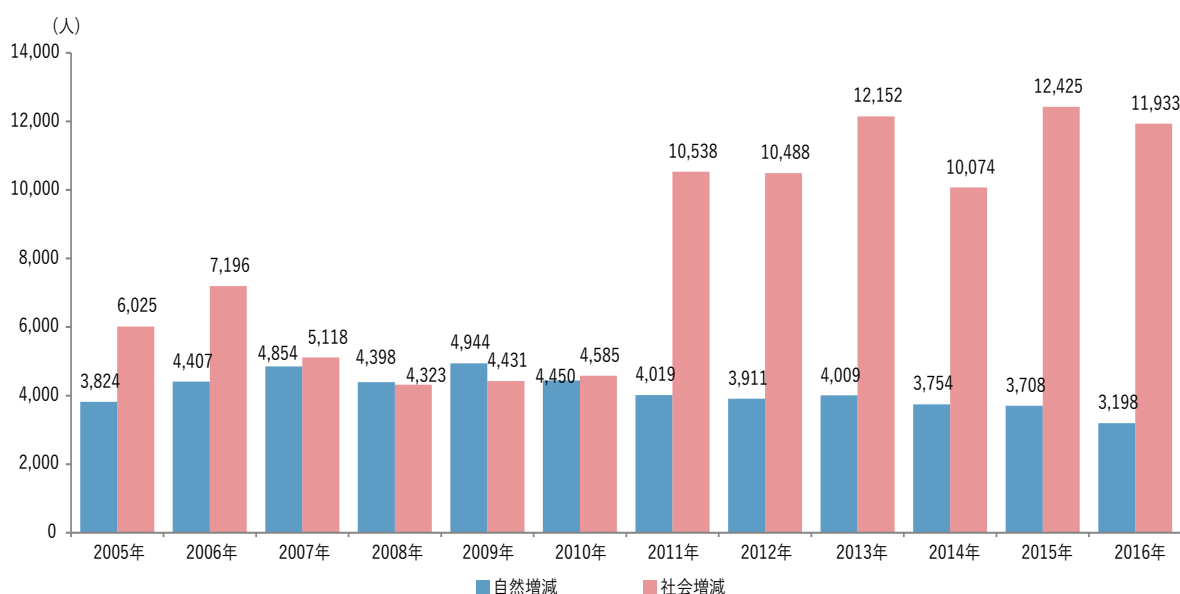


福岡市の推計人口と年齢構成の変化（出典：「福岡市の将来推計人口」（2012 年 3 月推計）を加工して作成）

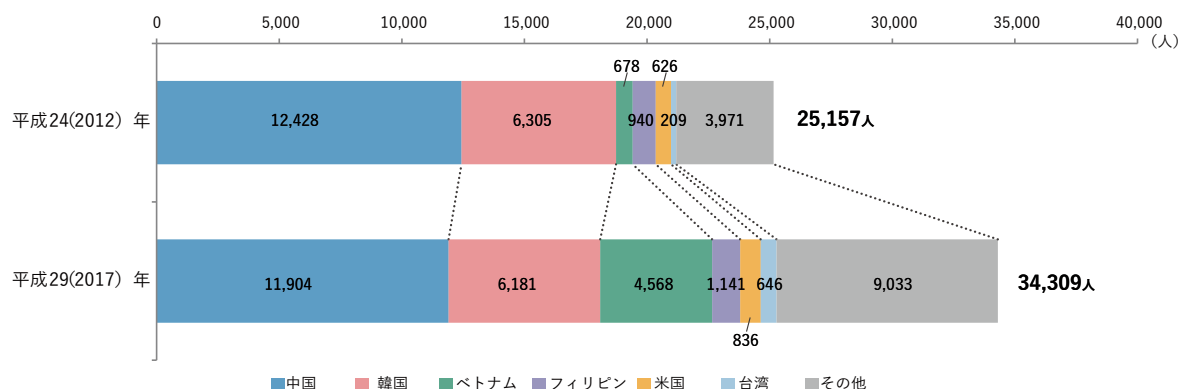
クに減少に向かう見込みです。さらに、老年人口（65 歳以上）は総人口の 20.7%と全国平均の 26.6%を下回るものの、前回より 3.1 ポイント上昇しており、高齢化が進んでいます。今後も一貫して老年人口が増加し、2040 年には全体の 31%に達すると予想されています。

本市における人口増加の要因は、主に社会増によるところが大きく、平成 23（2011）年以降は**毎年 1 万人以上の転入超過**となっています。自然増減は出生数が死亡数を上回っていますが、近年では自然増が減少傾向にあります。

また、転入人口のなかには**外国人も増加傾向**にあり、平成 24（2012）年から平成 29（2017）年までの 5 年間で 9,152 人増加しています。



人口動態（自然増減・社会増減）（出典：住民基本台帳）



在留外国人人口（出典：法務省在留外国人統計）

column : 02

都市発展の歴史 ～教育～

江戸時代の学校

福岡藩では、天明4（1784）年に東西2つの藩校を設置しました。一つは朱子学を主とする東学問所「修猷館」、もう一つは古文辞学を主とする西学問所「甘棠館」です。寛政10（1798）年、「甘棠館」が焼失したため、生徒は「修猷館」に編入されます。藩校「修猷館」は、曲折を経て現在、福岡県立修猷館高等学校となっています。幕末には医学をはじめとする西洋の技術を学ぶ医学館「養生館」も設置されました。医学館は明治時代に数度の改称を経て、明治21（1888）年、県立福岡病院となりました。

帝国大学の誘致

明治30年代、帝国大学の医科大学（医学部）が増設されることになりました。福岡では医科大学の誘致運動のため、地元の実業家渡辺與八郎が多額の寄附金を提供しました。県による県立福岡病院の敷地・建物・設備および建設費等の寄付が決め手となり、明治36（1903）年、筑紫郡千代村（現 博多区）に京都帝国大学福岡医科大学（現 九州大学医学部）が設置されました。

明治40年代には工科大学（工学部）の新設が決定します。建設候補地は福岡市近郊の糟屋郡箱崎町（現 東区）と早良郡西新町（現 早良区）でしたが、医科大学との近さから箱崎町が選ばれました。明治44（1911）年、医科・工科の2科大学からなる九州帝国大学（現 九

州大学）が成立しました。九州帝国大学は大正時代から昭和初期の間に農学部、法文学部、理学部を増設します。

九州帝国大学の成立と学部の拡充は、多くの学生を生み出し、箱崎の市街地化を促しました。また、学生の娯楽の場は中洲や天神といった福岡市の繁華街でした。

増える学校

明治時代から昭和戦前にかけて、福岡市では教育機関の設置が相次ぎ、その一部は今日まで続いています。

明治時代には福岡県立福岡工業学校（現 福岡工業高等学校）、福岡市商業学校（現 福翔高等学校）、筑紫高等女学校（現 筑紫女学園中学校・高等学校）、九州高等女学校（現 福岡大学附属若葉高等学校）、福岡高等裁縫研究所（現 精華女子高等学校）が開校しました。

大正時代には福岡県立福岡中学校（現 福岡高等学校）、西南学院高等部（現 西南学院大学）、川島裁縫女学校（現 福岡舞鶴誠和中学校・福岡舞鶴高等学校）、福岡県立女子専門学校（現 福岡女子大学）、福岡県筑紫中学校（現 筑紫丘高等学校）が開校しました。この時期には、市街地から郊外まで、学校の所在地も分散するようになりました。

昭和に入ってから、福岡女子商業学校（現 福岡双葉高等学校）、福岡高等商業学校（現 福岡大学）が開校しました。



九州帝国大学工科大学

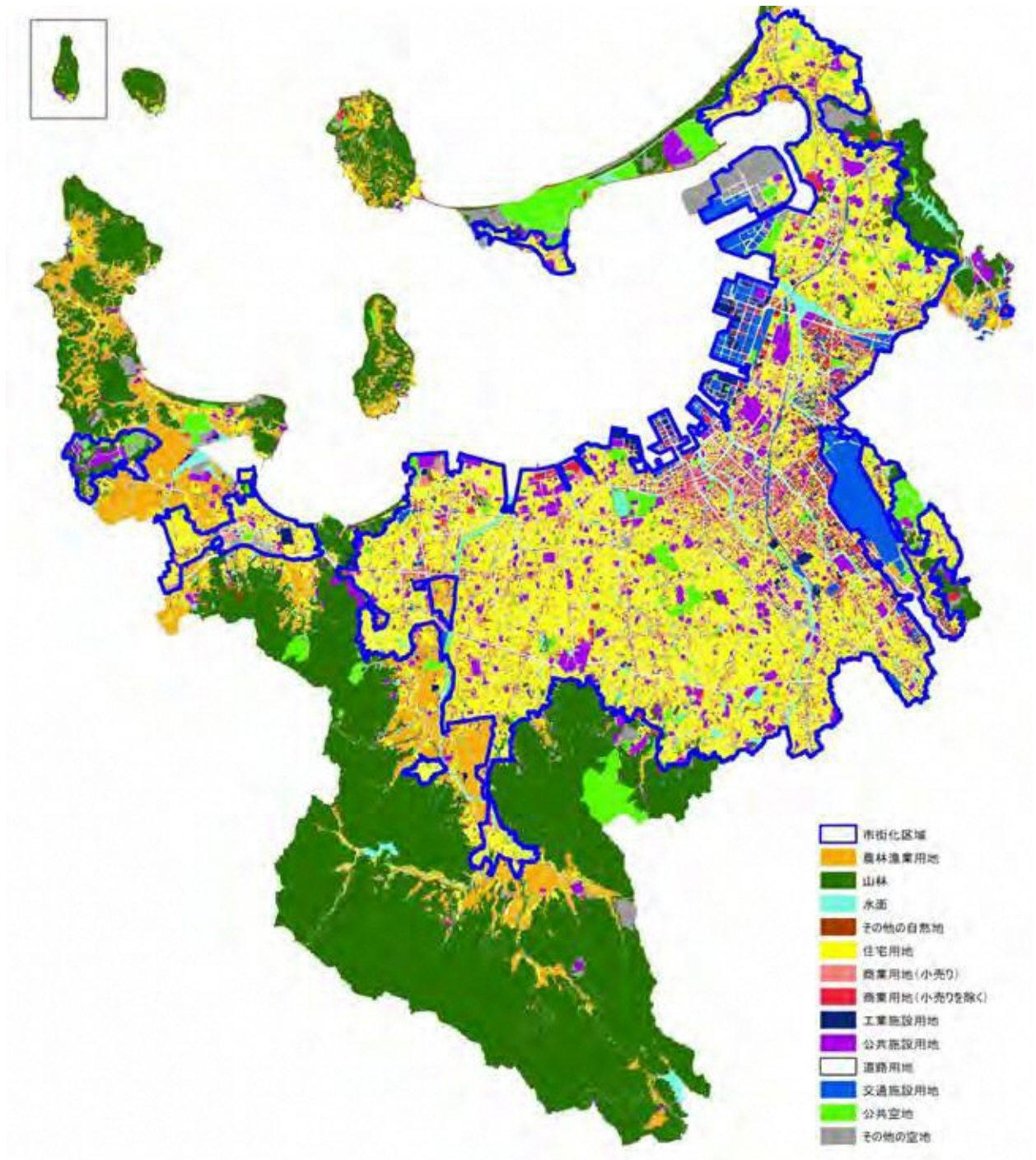


九州高等女学校

2) 土地利用

本市の土地利用は、都心部を中心に商業用地が集積しており、郊外に向かって住宅用地が広がっていますが、南側や西側には山林が立地するため、市街地が概ね 10 km 圏にコンパクトにまとまっています。

市街化調整区域の大部分は、山林や農林漁業用地となっており、西区の元岡^{もとおか}、金武^{かなたけ}、早良区^{わきやま}の脇山周辺には農地が集積し、自然景観を保持しています。



土地利用現況図 (出典：平成 24 年度都市計画基礎調査)

column : 03

都市発展の歴史 ～農業～

市街中心部を貫通する那珂川・御笠川を始めとして、東の多々良川や宇美川、西の室見川や十郎川、その他多くの大小河川の沖積低地から構成される福岡市内の平野部は、恒常的な灌漑が不可欠な水稻耕作に適した地形的特質をもつといえます。そのこととも関連し、朝鮮半島より稲作が伝来した紀元前8世紀以降の弥生時代には、市内河川中下流域の河成低地に遺跡が増加する傾向にあることが指摘されています。博多区の板付遺跡もこの時期を代表する集落遺跡の一つであり、台地上の環濠集落に日本列島でも最も早い時期に稲作が行われた低地の水田が付随しています。また近年の比恵遺跡群の発掘調査では、弥生時代後期から古墳時代前期初頭（紀元前後～紀元後300年頃）に機能した大規模な井堰の遺構が確認されています。

古代から中世にかけて、市域には博多荘・席田荘・野芥荘・入部荘・山門荘・怡土荘、香椎郷・樋井郷・那珂東西郷・戸栗郷・脇山院等々の荘園や郡郷が成立し、それぞれの村落では農業を中心とする生活が営まれました。この時期平野部で水田が経営される一方で、入り組んだ丘陵地の谷合や河川上流の山間部にも田地が開発されます。室見川上流の脇山には、貞観年間（9世紀後半）に紀州（現 和歌山県）から来た熊野比丘尼の指導で掘削されたと伝わる「釣溝」と呼ばれる用水路が存在し、村内の田地を潤す重要な水利施設として現在も使用されています。また「釣溝」を見下ろす小高い丘には比丘尼の墓が設けられ、地域の人々により感

謝の意を込めて祭事が続けられています。

近世に入ると領主権力の確立や社会の安定化を背景として、平野河口部の低湿地でも大規模な土木工事を伴う干拓事業が行われました。18世紀初頭に行われた多々良潟の開拓や、江戸時代前期から幕末にかけて継続的に行われた今津湾の新田開発等がよく知られています。中でも今津湾に面した女原村内で実施された新田開発には、日本初の体系的な農学書として高く評価される『農業全書』を著述した宮崎安貞も関与していました。近年の区画整理事業で誕生した西都地区の中に、「宮崎開」という字名が残っています。農業指導者としての彼の功績を讃えて毎年6月に顕彰祭が開かれるなど、今でも安貞の名は地域の人々の記憶に深く刻まれています。

幕末、長崎で西洋科学の知識を得て農業を学び、『農家備要』を著述した福岡藩士として河野禎蔵の名が知られます。また同じく福岡藩士出身の林遠里は、明治維新後に早良郡重留に居住し、農場「勸農社」を開いて農事改良に心を尽くしました。彼の発案した稲作や馬耕の技術は「筑前農法（福岡農法）」として広められ、全国的にも大きな影響を与えました。農場の跡と遠里の墓地は現在も重留に残されています。

稲作の伝来以来、長い間市内の多くの地域では農業が生活の基盤でしたが、戦後、市街地の拡大と産業の変容によって、市内平野部からは農村の風景が徐々に姿を消していきました。



灌漑のため構築された那珂川・番託井堰

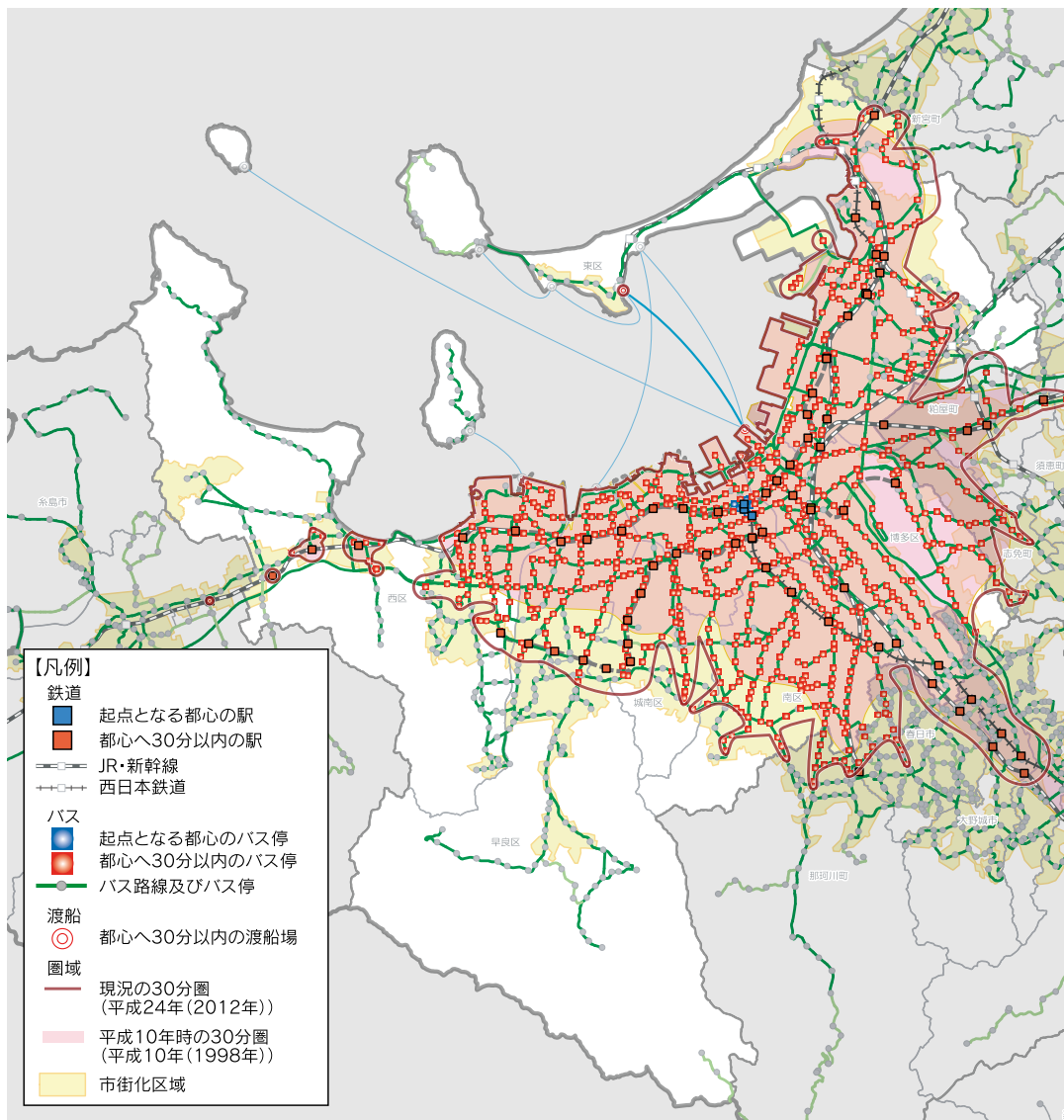


橋の名としても残る「宮崎開」

3) 交通・流通

市内の主な公共交通機関は、鉄道・地下鉄と路線バス、島しょ部を結ぶ渡船等です。本市では、天神・博多の都心部を中心として、鉄道に沿ってY字型の形で都市が発展してきましたが、地下鉄七隈線^{ななくま}の開業や福岡外環状道路、都市高速道路の整備等により、放射環状型の交通軸が形成されています。バス路線も充実していることから、市街化区域のほぼ全域が公共交通を利用して30分以内で都心へ移動することが可能であり、交通利便性は高いと言えます。また、新幹線を含む多くの鉄道路線が乗り入れている博多駅、九州島内を中心に全国と高速バス路線で結ぶ西鉄天神バスターミナルと博多バスターミナル、国内線26路線・国際線22路線（平成31年3月現在）を有する福岡空港は九州の長距離交通の結節点となっています。福岡空港から都心までの所要時間は15分以内と短く、**空港から都心部へのアクセスが良い**ことも特徴の一つです。

国際拠点港湾に位置付けられている博多港からは、**国内外の主要港への航路ネットワーク**が築かれており、近年では、コンテナ取扱個数や国際乗降客数が増加しています。



公共交通機関による30分圏域（出典：福岡市総合交通戦略）

column : 04

都市発展の歴史 ～近代の市内交通網の形成～

博多駅の開業

明治 21 (1888) 年、九州を南北に縦断する鉄道の建設が、博多―久留米間の工事から始まりました。博多駅が開業したのは明治 22 (1889) 年 12 月のこと。筑後川の洪水により、川の北岸に仮停車場を設け、博多―千歳川で営業を開始しました。翌年、博多―久留米間が開業しました。明治 42 (1909) 年には門司―鹿児島間が全線開通しました。

路面電車の誕生

路面電車はチンチンと音を立てて走行するため、「チンチン電車」とも呼ばれます。福岡・博多の市街地を走る路面電車が登場したのは、明治 43 (1910) 年でした。この年、第 13 回九州沖縄八県連合共進会が福岡市内の肥前堀埋立地で開催されました。共進会の開催に合わせ、福沢桃介、松永安左エ門らが設立した福博電気軌道会社が、大学前―西公園下間（貫通線）と博多駅―呉服町間（呉服町線）の 2 路線を開通させます。福博電気軌道は、同年中に貫通線を東は箱崎、西は地行まで延伸しました。一方、翌年には、渡辺與八郎ら地元の有志が組織した博多電気軌道が博多駅前―天神町―取引所間の路面電車の営業を始めます。博多電気軌道は取引所前から大学通まで路線を伸ばし、九州水力電気と合併した後、大正 3 (1914) 年に大学通―博多駅前間を開通させ、循環線を形成しまし

た。循環線の線路の多くは、渡辺が取得した道路用地に敷かれました。渡辺は循環線の開通をみることなく明治 44 (1911) 年に亡くなりましたが、渡辺が取得した道路の一部は今日まで「渡辺通」の名称で親しまれています。

交通網の広がり

昭和 2 (1927) 年の東亜勸業博覧会の開催中、九州水力電気は渡辺通 1 丁目―西新町駅間の城南線を開通させ、市内西南部まで路面電車の路線が広がりました。昭和 9 (1934) 年、福博電気軌道と博多電気軌道の両系統の路面電車事業は、福博電車に引き継がれました。

路面電車以外にも、大正 13 (1924) 年に博多湾鉄道汽船が新博多―和白間を開通させ、翌年に宮地嶺まで延伸します（現 西日本鉄道貝塚線）。九州鉄道も大正 13 年に福岡―久留米間で開業し、昭和 14 (1939) 年には福岡―大牟田間が全線開通しました（現 西日本鉄道天神大牟田線）。大正 15 (1926) 年には北九州鉄道が博多と東唐津間を結びました（現 JR 九州筑肥線）。

昭和 17 (1942) 年、福博電車、九州鉄道、博多湾鉄道汽船など 5 社が合併し、西日本鉄道が成立しました。路面電車は福岡市内線として戦後も長く福岡市内の主要交通手段でしたが、自動車の普及とともに乗客が減少し、昭和 54 (1979) 年に全線が廃止されました。



天神町を走るチンチン電車



昭和 2 (1927) 年頃の市内の鉄道路線図

4) 産業

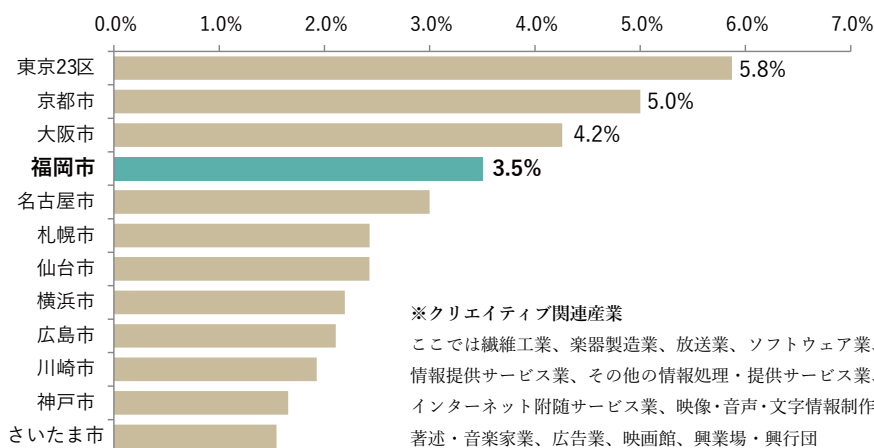
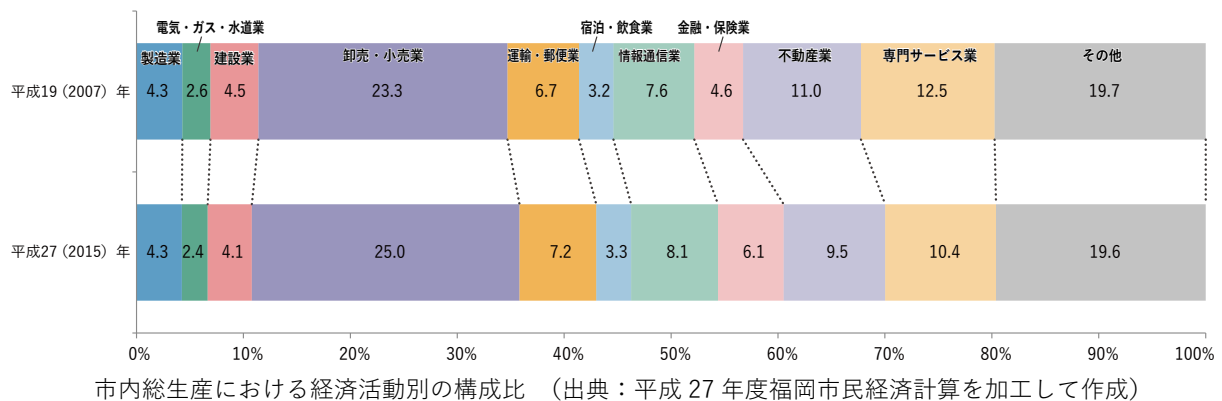
本市の市内総生産における経済活動別の構成比では、**第三次産業が全体の約9割**を占めており、なかでも卸売・小売業、不動産業、専門サービス業などの割合が高くなっています。

全国の多くの都市が、近代以降の工業化により発展をしてきた中において、第三次産業に特化した産業構造を構築してきたことにより、脱工業化による衰退を免れてきた側面もあります。

市内には、九州全域にまたがる交通や社会インフラ、また、マスメディアの本社が多く存在します。創業100年を超える事業者においては、企業資料が蓄積され、都市やまちなみの展開を考えるうえで重要な情報資産となっています。

近年では、ゲーム、デザイン、音楽などクリエイティブ関連産業事業所の全事業所に占める割合が、国内の人口100万人以上の大都市のうち4位になるなど、**クリエイティブ関連産業の集積、拠点化**がみられます。

また、本市は「グローバル創業・雇用創出特区」として、創業の支援と雇用の創出に取り組んでおり、開業率は7.5%と全国平均の5.6%に比べても割合が高く、**全国トップクラス**の水準を示しています。



クリエイティブ関連産業事業所が全事業所に占める割合（出典：平成28年経済センサス活動調査）

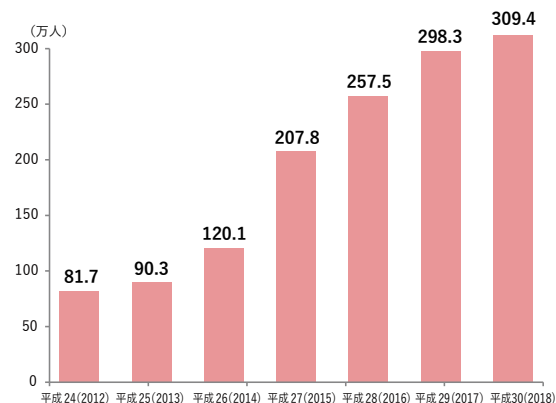
5) 観光

本市は、全国的には観光地としてのイメージが薄いものの、平成 28（2016）年の入込観光客数は、2,000 万人を突破し、訪日外国人観光客などの増加により、5 年連続で過去最高を更新しています。

また、平成 30（2018）年の福岡空港及び博多港からの外国人入国者数は、300 万人を超え、こちらも 7 年連続で過去最高を更新しています。

平成 30（2018）年の**博多港のクルーズ客船寄港回数**は 279 回と日本で最も多く、博多港に寄港する大型クルーズ客船は、本市の風景の一つとなりつつあります。

また、本市では国際会議や見本市といった MICE の誘致に積極的に取り組んでおり、**国内でトップクラスの開催件数**となっています。



外国人入国者の推移

(出典：福岡市経済の概況 2019 年 3 月)



博多港に寄港中の大型クルーズ客船

年		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位
2011 年	都 市	東京	福岡	横浜	京都	名古屋	神戸
	件 数	470	221	169	137	112	83
2012 年	都 市	東京	福岡	京都	横浜	大阪	名古屋
	件 数	500	252	196	191	140	126
2013 年	都 市	東京	福岡	横浜	京都	大阪	名古屋
	件 数	531	253	226	176	172	143
2014 年	都 市	東京	福岡	京都	横浜	名古屋	大阪
	件 数	543	336	202	200	163	130
2015 年	都 市	東京	福岡	仙台	京都	横浜	名古屋
	件 数	557	363	221	218	190	178
2016 年	都 市	東京	福岡	京都	神戸	名古屋	横浜
	件 数	574	383	278	260	203	189
2017 年	都 市	東京	神戸	京都	福岡	名古屋	横浜
	件 数	608	405	306	296	183	176

国際会議の開催件数 (出典：日本政府観光局「国際会議統計」)

6) 文化

●食文化

玄界灘に面し、山地に囲まれた本市は、昔から海の幸や山の幸が豊富にとれる場所でした。それらの食材は、海を通じた交流の歴史の中で様々なかたちで楽しまれ、豊かな食文化を築いてきました。

ごまさばなど新鮮な海産物を活かした料理や、朝鮮半島に起源を持ち徐々に定着していった辛子明太子、中国から博多に伝わった製粉技術から発祥したうどんのほか、もつ鍋、水炊き、とんこつラーメン、がめ煮（筑前煮）など、福岡の食文化として全国的に広く親しまれているもののほか、おきゅうとやあぶってかも（スズメダイ）など本市でしか味わえないものも多くあります。また、夜の風物詩である屋台は、市民はもちろん、観光客にも人気のスポットになっています。



うどん



屋台

●伝統工芸

博多部を中心に**博多織**、**博多人形**、**博多鋏**^{ばさみ}、**博多独楽**などの伝統工芸の技術が受け継がれています。



博多織

●祭り

国の重要無形民俗文化財であり、ユネスコ無形文化遺産にも登録された「**博多祇園山笠**^{ぎおんやまかさ}行事」や、「**博多松ばやし**」から発展した「**博多どんたく港まつり**」など、全国的にも有名な祭りは、本市ににぎわいと活気を与えています。また、^{ほこぎきぐう}宮崎宮の「**放生会**」や^{ほうじょうや}「**玉せせり**」、^{たま}十日恵比須神社の「**十日恵比須**^{とおかえびす}」など、神社の年中行事のほか、地域の伝統的な行事が毎年実施されています。このような祭りは、季節の移り変わりを告げる行事として市民に親しまれています。



博多どんたく港まつり

●芸術

本市には、官民によって整備された様々なホール施設やミュージアムにおいて、国内外の質の高い文化芸術に触れる場が数多く提供されています。また、音楽、美術、舞踊など幅広い分野で公演や展示などを行う文化芸術団体が数多く存在するほか、文化芸術の普及や人材育成、情報提供などを行う NPO 法人が増加するなど、市民による文化芸術活動も活発に行われています。

また、本市の特色として、**アジアと地域のアーティストやクリエイターとの交流がさかん**であることが挙げられます。その交流拠点として、恒常的にアーティスト・イン・レジデンスを行う福岡アジア美術館、アジアのフィルムアーカイブを蓄積する福岡市総合図書館映像ホールがあります。

その他にも大規模な交流イベントとして、アジアのコンテンツやエンターテインメントを一堂に介するフェスティバル、福岡アジア文化賞、アジアフォーカス・福岡国際映画祭などが開催されています。

column : 05

都市発展の歴史 ～山笠と博多松ばやし～

山笠と博多松ばやしの歴史

博多を代表する祭礼行事に、博多祇園山笠行事と博多松ばやしがあります。どちらも歴史が古く、博多の町の成り立ちや住人の生活と深い関わりを持つ重要な民俗行事です。

室町・戦国時代までの山笠や松ばやしは博多の住人とどのような関係をもっていたのかは明らかではありません。しかし、豊臣秀吉による博多の復興と都市整備を経て、江戸時代以降の博多では「流」と呼ばれる町の連合組織が、祭礼の運営主体となっていきました。江戸時代の流は博多を貫く幹線道路を軸として、その道筋に面して成立した町々から構成されていました。

旧暦七月の祇園山笠行事では、各流が人形で飾り立てた山笠を仕立て、櫛田神社へ奉納しました。また旧暦正月の松ばやしでは、各流が三福神（福神、恵比須、大黒）・稚児舞を仕立て、福岡藩主黒田家のもとへ祝賀に訪れました。

戦後復興と山笠・博多松ばやし

博多の住人のアイデンティティと結びついた山笠や博多松ばやしは、第二次世界大戦の被害を受けた博多の復興に際しても大きな役割を果たしました。

たしました。戦災復興の旗印として、博多松ばやしは昭和 22（1947）年のどんたくにあわせて、山笠は昭和 23（1948）年に再開されて人々に勇気と笑顔を与えました。

現在、毎年 5 月の GW に実施される博多どんたく港まつりは、西日本最大規模の集客を誇り、本市の繁栄を象徴するにぎやかな祭りです。祭りのメインとして様々なグループによるパレードが行われますが、これはかつて松ばやしの行列で、三福神・稚児の後ろから博多の町の人々が様々な趣向を凝らした山車や仮装の「通りもん」を繰り出して付きしたがったものが、変化したとみることができます。博多と地域を代表する二つの祭りは、深く結びつきながら発展を遂げ、市ににぎわいを与えています。



どんたくパレードの先頭に行く博多松ばやし稚児舞